

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03414

研究課題名（和文）神経難病患者に対する心理療法と音楽療法との協働の可能性

研究課題名（英文）Possibilities of collaboration between psychotherapy and music therapy for patients with intractable neurological diseases

研究代表者

吉田 圭吾（Yoshida, Keigo）

神戸大学・人間発達環境学研究所・教授

研究者番号：00230730

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ALSやパーキンソン病、筋ジストロフィーなどの神経難病に対し、音楽療法と心理療法が協働して支援することにより、患者の精神的健康のうち、活気・活力や友好などのプラスの側面が優位に上昇した。このことから、神経難病患者に対する心理ケアとして、音楽療法のみ、また心理療法のみではなく、2つの療法を同時期に行い、両療法士が協働することは、療養生活の活気や活力を高め、他者に対する友好的態度が培われるなど、寛解のない神経難病患者にプラスの影響があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

神経難病患者は、自身が不治の病に罹患したという診断を受けた後、ショックを受け、病気受容に困難を覚えると共に、人前に出ることには抵抗を感じてひきこもり気味になってしまうことも多い。そのような患者に音楽療法と心理療法の協働を提供することで、患者の人生に活気を蘇らせ、他者に対して友好的な感情を高め、QOL（生活の質：Quality of Life）を向上させる。それに加え、介護者を含めた患者の周囲の人へのケアの道が拓けるなど、社会的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：To patients of Amyotrophic Lateral Sclerosis, Parkinson's disease and Muscular Dystrophy, we gave collaboration of music therapy and psychotherapy to heighten the score of mental health inventory. Results were that collaboration of them heightened the vitality or liveliness and friendshipness of these patients and patients received vitality of life and felt friendly feeling to other people after they experienced this collaboration.

研究分野：臨床心理学

キーワード：神経難病 音楽療法 心理療法 協働 精神的健康 生活の質

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

神経難病とは、しっかりとした原因が確定されておらず根治的な治療法がない病気で、2024年4月、341疾病が国指定の特定疾患とされている。その中でも神経や脳を侵す神経難病は進行性で、脊髄小脳変性症、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症(ALS)、筋ジストロフィー、脊髄小脳変性症、多発性硬化症、などといった疾患がある。

現在、我が国での音楽療法の対象者は高齢者や障害児(者)が多く、病院での臨床は精神科がほとんどである。神経難病についてはパーキンソン病の歩行に関するリハビリを目的にしたものが1990年代半ばより始まり、心理ケアを目的とした神経難病患者に対する事例研究は、2005年頃より行われるようになった(近藤、2005)。しかし、先行研究も少なく、音楽療法士が神経難病について学ぶ場もほとんどなかった。歩行訓練のために音楽のリズムやテンポを利用することは効果的であるが、神経難病患者にこそ心理ケアを目的とした音楽療法が必要であるという考えに至った理由について述べる。

患者は、日々進行していく病状に対する不安に加え、球麻痺による言語や文字での意思表示ができなくなる不安など、心理的な痛みを苦しむ。特に言語での意思表示ができなくなるということは、単なる不便ということを超えて、他者とのコミュニケーションや社会との交流そのものが途絶えるという恐怖を引き起こしかねない。さらに家族の中での役割も見いだせなくなり、介護を受けるだけになった自分自身の存在に、生きる意味があるのだろうか、という自分自身の生命の価値や存在の意味などのスピリチュアルな問題を抱えることも少なくない。そのような患者に対し、病院では心理士を配置し心のケアを行うところも増えてきたが、病状が進むとカウンセリングなどの言葉を用いたケアが困難になってくる。そこで、長年音楽と共に生きてきた神経内科医は、言語を介さず直接こころで感じ、他者とコミュニケーションをとることのできる“音楽”が、患者の心身の痛みを和らげることができるのではないかと考え、音楽療法士と研究を始めたのである。

その研究では、患者のスピリチュアルケアや家族の心理ケア、音楽によるカタルシス効果、また、医療関係者など援助者の患者理解を深めるきっかけなど、音楽療法が果たす役割が明らかになった。

ここまでの神経難病に対するプラスの効果として、下記のもものが挙げられる。

- (1)音楽の持つカタルシス効果と情動の賦活
- (2)音楽によるライフレビュー
- (3)自己肯定感と尊厳の回復の手がかりとなる(ナラティブアプローチの観点から)
- (4)訪問音楽療法による在宅療養者の心のケア
- (5)次回のセッションを待つことで療養生活の活力を得ることができる
- (6)家族にとっての気分転換やストレス発散となり、援助者の患者理解が深まる

これまでの音楽療法の研究により、在宅で療養中の神経難病患者に対して、精神的健康の面でマイナスの感情を抑制し、プラスの感情を賦活させる効果が証明されている。しかし、ライフレビューに関しては、言語的介入が専門ではないので、中途半端にならざるを得ない。そこで、言語的介入の専門家である心理療法家と協働することによって、自分の人生の意味づけをプラスに変えていくことにより、精神的健康をプラスに変化させるだけでなく、生きがい意識もプラスにする効果が期待される。

2. 研究の目的

筆者らは、先行研究にある音楽療法士のみが患者に関わるのではなく、心理療法も併用し、音楽療法と心理療法の協働によって、神経難病患者の精神的健康を高めることを目的として研究を計画した。先行研究の音楽療法の効果に加えて、心理療法士がライフレビューを行うことによって、精神的健康を高めると共に、人生への肯定的評価を高めることを予測した。今まで音楽療法と心理療法の協働の研究はなく、独創的であると思われる。

本研究は、パーキンソン病及び筋ジストロフィー症の患者に対して、音楽療法と心理療法を併用し、患者の精神的健康及び生きがい意識へのプラスの効果を及ぼすかどうかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

➤ 対象

・患者：11名

パーキンソン病患者会に研究協力を依頼した7名、音楽療法学会近畿支部会員に依頼したパーキンソン病患者1名、筋ジストロフィー患者1名、神経内科医の紹介によるALS患者2名の、計11名である。うち、1名は音楽療法、心理療法を1回ずつ実施後に亡くなったため中止となったが、担当セラピストへのアンケートに回答してもらっている。発症から5年未満が1名、5～9年が4名、10～19年が3名、20年以上が2名、1名は不明、また、10名が自宅療養中、1名が入所施設にて療養している。意思疎通は9名が通常の会話が可能、2名は文字盤、PCへのWord入力である。

・音楽療法士：8名

セラピストの臨床領域は、認知症高齢者、障害児(者)、精神障害者で、神経難病患者への臨床経験者は4名である。

・心理療法士：5名

セラピストの臨床領域は、医療、福祉、教育現場でのカウンセリングを主とし、神経難病患者への面接経験があるのは1名である。

➤ 期間と頻度

X年3月～12月、頻度は3週間から4週間に1度を基本とし、1セッション60～90分、音楽療法を6回、心理療法を3回行う。2つの療法の順は、音楽療法 心理療法 音楽療法 心理療法 音楽療法 心理療法

➤ セッションの形態

音楽療法：音楽療法士(日本音楽療法学会認定音楽療法士)1名が患者宅を訪問し、リビング、療養室などで行う。使用楽器はキーボード、ギター、ライヤーなどで、選曲は患者のリクエストを中心とし歌唱・演奏を行う。また、音楽の話題から連想した曲も扱い、曲についての想いなどを語ってもらう。家族が同席することもある。

心理療法：心理療法士(臨床心理士、公認心理師)1名が患者宅を訪問し、リビング、療養室などで行う。

➤ 評価方法

音楽療法の第1回目、開始前にPOMS2、および生きがい意識尺度を施行。心理療法の第3回目、終了後にPOMS2、および生きがい意識尺度を施行する。

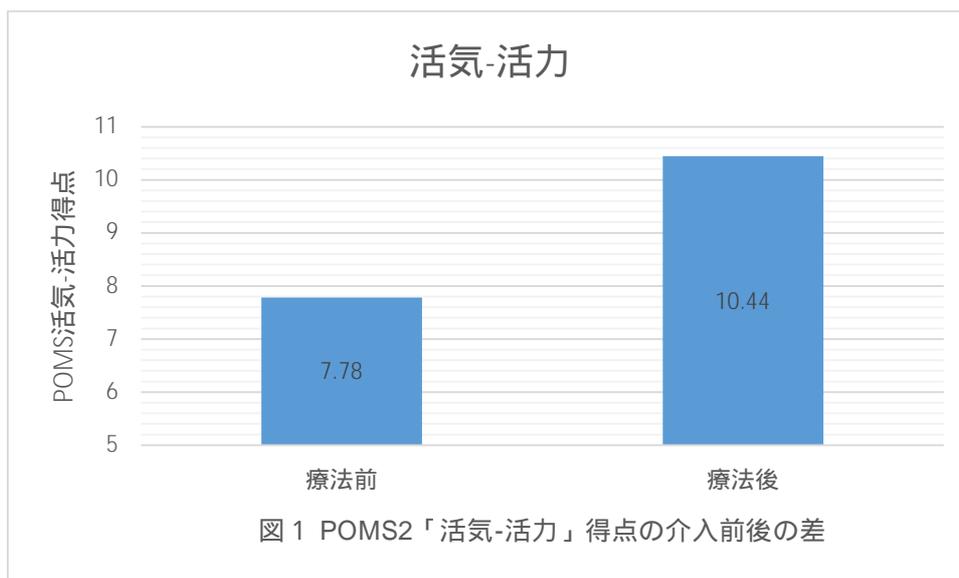
4. 研究成果

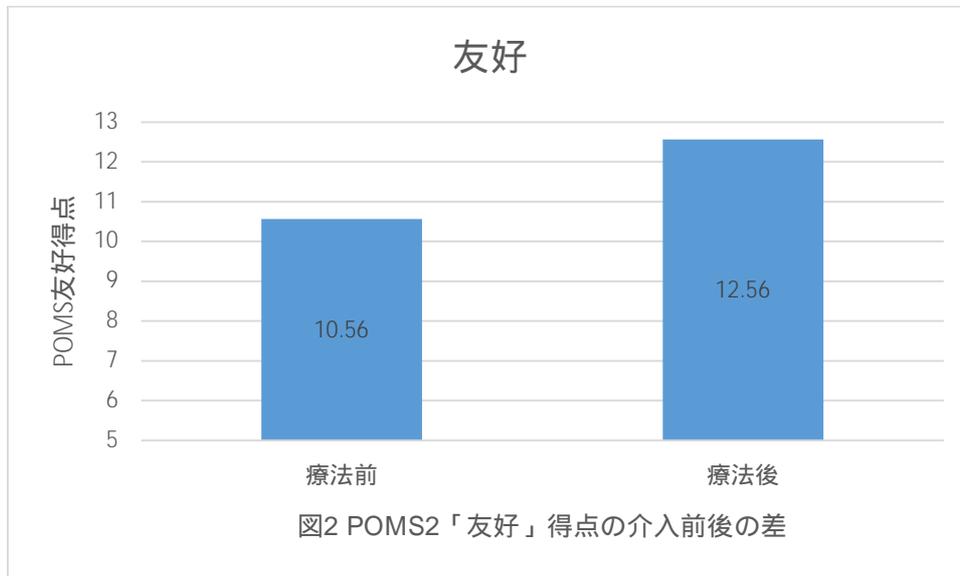
POMS2と生きがい意識尺度の項目は下記の通りである(表1、表2)

9名のPOMSの各下位尺度(「怒り-敵意」「混乱-当惑」「抑うつ-落込み」「疲労-無気力」「緊張-不安」「活気-活力」「友好」)の介入前後の得点の差を、対応のあるt検定で分析した(表3)。その結果、「怒り-敵意」「混乱-当惑」「抑うつ-落込み」「疲労-無気力」「緊張-不安」のネガティブ要素5下位尺度においては、有意差は得られなかった。一方、「活気-活力」と「友好」において、介入後の方が介入前に比べて有意に高かった。すなわち、音楽療法と心理療法を受けた後の方が、介入前に比べて、有意に“生き生きする”“精力がみなぎる”などの「活気-活力」や、“人付き合いが楽しい”“他人を思いやる”などの「友好」が、高かった。

表1 各尺度の療法前後の平均値(標準偏差)とt値及び確率(有意性)

	療法前	療法後	t値	確率	有意性
怒り-敵意	3.22(3.11)	4.00(1.58)	-0.714	0.348	
混乱-当惑	7.00(4.50)	7.11(4.70)	-0.065	0.475	
抑うつ-落込み	5.44(4.22)	5.56(2.40)	-0.070	0.474	
疲労-無気力	7.67(3.97)	8.67(4.87)	-0.619	0.277	
緊張-不安	6.67(3.78)	6.78(2.59)	-0.087	0.466	
活気-活力	7.78(3.90)	10.44(3.58)	-2.469	0.019	*
友好	10.56(2.56)	12.56(3.47)	-2.155	0.032	*
生きがい意識	28.89(11.91)	28.33(6.87)	0.321	0.378	





先行研究の加戸(2016)、加戸(2018)では、ポジティブ得点も上昇し、ネガティブ要素も低下したのにも関わらず、本研究では、ポジティブ得点は上昇したが、ネガティブ得点は変化がなかった。その理由として、POMSの改訂が挙げられる。2012年にPOMSからPOMS2に改訂されて項目も多少変更され、またポジティブ要素が、POMSでは「活力-活気」しかなかったが、POMS2からは「友好」が加わった。ただ、項目の変更も若干であり、ほとんどの項目は一緒であった。

さらに、本質的な理由として、心理療法が加わったことによる影響である。音楽療法のみで介入した場合は、心の健康な部分にアプローチし、感情の賦活化とカタルシス効果により、病気のストレスの発散につながったことから、ネガティブ要素も低下した。印象に残る音楽にまつわる人生の出来事や、失敗や落込みの記憶も語られるが、その暗い気持ちを音楽が明るくしてくれたなど、音楽の力による立ち直りや落込みの防止の語りになりやすいと思われる。

一方、心理療法は、例えばBさんのように、「自分の心の中には心の闇がある。それを語りたい」というように、自分の心のネガティブな要素を語りたいという場合も患者さんによればあった。その場合は、語ることによりPOMS2でいうネガティブな要素が刺激され、一時的に得点が高くなることもあったのではないだろうか。

さらに、心理療法の特徴として、かなりの患者が、発病前後のことを積極的に語る傾向があった。パーキンソン病であれ筋ジストロフィー症であれ、神経難病を発病するということは、患者にかなりのショックと不安、悲しみをもたらす。発病前後の話をする、やはり当時のショックや怒り、悲しみが思い出され、気分としてはネガティブな要素が入ってくると思われる。ライフレビューが、ネガティブな体験の再意味付けによる受容を目指す限り、ネガティブな要素の上昇は、ある程度見込む必要があると思われる。

引用文献

今井忠則,長田久雄,西村芳貢(2012)「生きがい意識尺度の信頼性と妥当性の検討」,日本公衛誌,第59巻,第7号,433-439.

加戸敬子,大野真紀子,松村毅,猪山昭徳,藤村晴俊(2019)「集団音楽療法によるパーキンソン病患者の心理的効果 - POMS(気分プロフィール検査)短縮版を用いて」,大阪成蹊短期大学研究紀要,第56号,17-23.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 加戸敬子, 吉田圭吾	4. 巻 20
2. 論文標題 音楽療法におけるソングライティングー統合失調症患者の事例からー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪成蹊短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉田圭吾, 加戸敬子
2. 発表標題 《心の窓》を通してクライアントを理解する(5)ー中学におけるトカゲを愛しこだわりの強い男子生徒との初期面接
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 吉田圭吾・加戸敬子
2. 発表標題 《心の窓》を通してクライアントを理解する（3） 中学におけるリストカット及び性的行動化の事例
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 加戸敬子・吉田圭吾
2. 発表標題 《心の窓》を通して生徒を理解する（4） 精神科病棟でのソングライティング
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2020年～2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉田圭吾 加戸敬子 齊藤誠一	4. 発行年 2024年
2. 出版社 神戸大学生協出版	5. 総ページ数 66
3. 書名 神経難病患者に対する心理療法と音楽療法との協働の可能性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	齊藤 誠一 (Saito Seiichi) (60186939)	大阪信愛学院大学・教育学部教育学科・教授 (34455)	
研究分担者	加戸 敬子 (Kato Hiroko) (60751188)	大阪成蹊短期大学・幼児教育学科・教授 (44413)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------